

## 39 パリのパサージュ (フランス)

大都会が秘める小さな街



### 建物のなかの抜け道

パサージュは、大都会パリのなかにさし込まれた小さな街である、と考える。

パサージュは、両側を建物で囲われ、鉄骨の小屋組とガラスの屋根で覆われた街路である。そこは人が歩くための道で、両側には店が並び、雨に濡れることはなく、磨りガラスを通して一様に弱められた光に包まれている。

パサージュといえば、フランスやベルギー、とりわけパリのものをいうことになっている。同種の街路をロンドンではアーケードと呼ぶが、横に並ぶ店や道行く人々の雰囲気もパリとは異なっている。また、この種の空間で大規模なものは、例えばミラノのガレリアなどが知られているが、一般にパサージュといえば、もっと小さな、道幅せいぜい4m程度、高さは2-3階程度のものを指す。

パリのパサージュは道の上に屋根を架けたのではなく、街区を囲む大通りから大通りへ、建物の固まりを貫通するようにつくられた抜け道（パス）である。ここがどんな雰囲気を持っているか。まず、建物と人の距離が近く親密なスケールなので、道にいるというよりは建物のなかにいる気がする。そこは確かに道ではあるが、雨も落ちてこないし、光もぼんやりとしているので、室内にいるような気分になるのである。ただ、デパートのなかの通路とはまた違い、もう少し道と店との仕切りははっきりしており、店ごとに看板を道の上に差し出し、売り物やイスを路上に並べている。いかにも両側の建物を覗くためにつくられた通路で、路地や横丁を歩くときに感じるプライベートな領域を侵している感覚に近い。

そして、店に並んでいるものは、なんとなくさんくさく、いかがわしく、古びている。やぼったく、やや悪趣味で、この上もなく郷愁をさそう。このノスタルジアの感覚こそが、パリのパサージュの本領であって、表の大都市とは異なった秩序を宿している街なのである。

### 19世紀前半の流行

パリにパサージュができるのは19世紀の前半である。それも1825年から1850年までに大半がつくられ、一時期の流行にもとづいた空間であったといえる。建築の歴史のなかで、流行（モード）が、短期間だけ生み出したビルディングタイプの、非常に初期のものであるといえるだろう。

パサージュはさまざまな意味で近代化の産物である。まず、材料。鋳鉄と板ガラスの大量生産が道に屋根を架けることをもたらしている。次にプログラム。こうした空間をつくるということは、そこを通り、物を買っていく人がいるということである。パサージュの原型はパレ・ロワイヤルに1788年にできたといわれるが<sup>1)</sup>、これは1789年のフランス革命勃発とほぼ同時である。そして、パサージュの黄金期はブルジョアジーの黄金期と一致する。この頃、パリで、さしたる目的もなく歩き、商品を眺めるという行動が生まれる。のちにデパートが相手にする客にほかならないが、こうした自由に使える金と時間を持つ人々がパサージュに集ったのである。さらに都市環境的側面。19世紀前半に都市は大膨張する。外の道にはまだ歩道はなく馬車が走り、インフラの整備が追いつかず公衆衛生も悪化した。こうした環境下で、パサージュが外の通りから通りへの抜け道としてつくられたのは頷けることである。

このようにパリのパサージュは、19世紀の近代

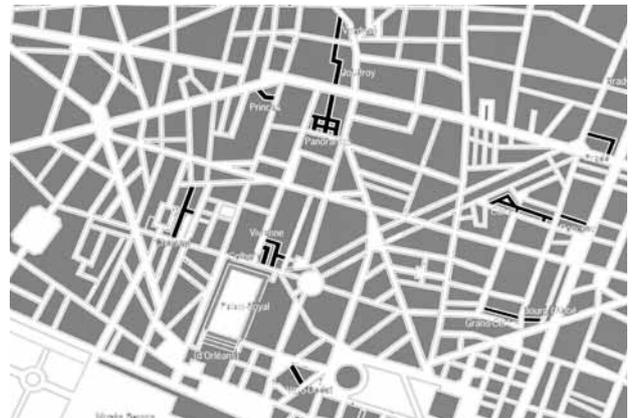


図1 パリのパサージュはルーブルの北、オペラ座からサン・ドニ街にかけて集中している（黒い部分）（文献 から作成）

\*1 文献 p.18-

\*2 Walter-Benjamin(1892-1940) 哲学者。ベルリンのユダヤ系家庭に生まれる。『ドイツ悲劇の根源』『複製技術時代の芸術作品』など、幅広い知識と多角的な観点から近代性について鋭く考察した。ナチスに追われ、パリを脱出後、ピレネー山中で服毒死。

\*3 文献 p.9

\*4 例えば日本でも、路地や横丁を縫って街を歩くととき、表通りを車で行くときとは、同じ地点でも街の感じ方がまったく異なる。普通、都市の把握は表通りの区画が目がいくが、小さな路地や横丁の連続、すなわち小さな街の連続で、都市が構成されているとは考えられないだろうか。昔の町名などは小さな単位で都市が考えられていたことを示すものであり、大きな道から都市を把握するようになったのは、車が走り、4m以下の道を排除するようになってからのことに過ぎないのではないだろうか。

化の過程にあって、物、人、街のいずれの側面からも時代を表象するものといえる。パサージュを見ることが近代を見ることにほかならない。ヴァルター・ベンヤミン<sup>2</sup>はそう考えた。

### 表通りとは違う秩序

ベンヤミンの最大の仕事、『パサージュ論』は奇妙な書物である。日本語版でいえば400ページ近い本が全5巻もあるのに、まとまった文章としては概要のみで、そのほかは長くても数ページ、ほとんどは数行の「覚え書および資料」から成り立っている。しかも、その多くはありとあらゆる書物や記事からの引用なのである。これゆえに『パサージュ論』は未完の書物の資料集だという見方もできる。しかし、これは哲学書から雑誌記事に至るまで膨大な量の文章の断片が「書きとめられた」ことによって意味をもつ書物なのだと、鹿島茂は指摘している<sup>3</sup>。これによれば、パサージュに関わる、時代、社会、思想、経済、事件、都市、建築などに関する文章が集められたことによって、パサージュがつくれ、出来事が起こり、そして廃れていく「状況」を描き出そうとしているということになる。さまざまな人が暮らし、同時多発的にいろいろなことが起きていることの総体が都市であることを、ベンヤミンは書物によって、しかし通常のように前から順に読まれるのではない仕方、表現しているのである。



図2 パサージュ・シュワズール 狭い道をガラスの屋根が覆う、直線では最も長い全長190mのパサージュ

### 参考文献

鈴木恂『光の街路』丸善,1989

鈴木恂『風景の狩人』彰国社,2006

新井洋一『パサージュ 遊歩の商業空間』商業建築社,2000

ヴァルター・ベンヤミン、今村仁司、三島憲一他訳『パサージュ論』岩波書店,1993-1995

鹿島茂『パサージュ論熟読玩味』青土社,1996

ベンヤミンが『パサージュ論』を書いた1920-30年代、すでに流行から100年を経ているパリのパサージュは、ノスタルジアの空間であった。そこは今でも、両端がつながっている外の大通りとは、同じ時間、同じ地面に存在するとは信じがたい、異なるスケール、異なる光、異なる秩序が支配する空間である。外の通りと同じ平面を歩いていくと、違う世界につながっている。古い室内というのはいくらでもあるが、それとも違い、建物のなかでもなく、外でもない。建物のなかにも通路がさし込まれていると見れば、通路に面した部分は、普通は隠されている古い室内の断面が開いているということになる。ここは大都会に秘められた、小さな妖しい街である。表通りとは違う小さな街のネットワークが、大都会には抱かれていることを、パサージュは垣間見せてくれる<sup>4</sup>。



図3 ギャラリー・ヴィヴィエヌ もっとも華麗なパサージュといわれ、手前は本屋で奥はレストラン